



第十回

星槎文芸大賞

令和六年度

受賞作品集

学校法人 星槎国際学園
SEISA

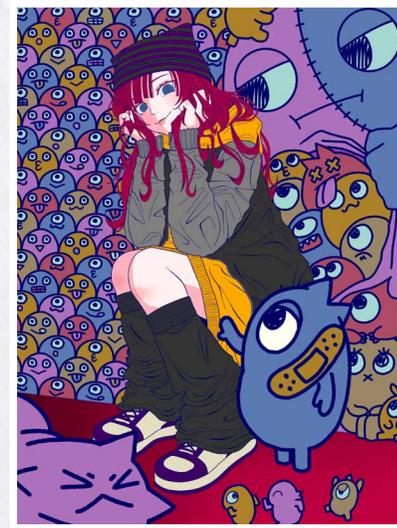
「踊る男女」山本 菜月 (星槎国際浜松3年)



「レンズに映る日常の風景」
河島 悠人 (星槎国際浜松2年)



「無題」
金田 幸桃 (星槎国際鴨居1年)



「カワイイ」
石原 采美 (星槎学園高等部横浜ポートサイド校3年)

星槎文芸大賞 実施要項（一部抜粋）

1. 目的

文芸創作活動に取り組むことで、関わり合いを大切にする星槎で育まれた感性を磨き、コミュニケーション能力、自己表現力を育て、作品を通して全国の仲間との交流の中で発見と感動の場をつくる

2. 応募資格

星槎国際高等学校、星槎学園、星槎高校、星槎中学校、星槎もみじ中学校、星槎名古屋中学校およびフリースタール生、提携先等、在籍生徒

3. 募集部門

- ① 小説
- ② 小論文
- ③ エッセイ
- ④ 詩
- ⑤ 俳句
- ⑥ 短歌

4. 応募規定

- ① 校内選考後の出品は生徒一人につき、一部門にしほり、作品数も一点に限る
- ② 応募作品は未発表作品に限り、他賞との二重投稿を禁止する
- ③ 受賞作品は発表時に修正を求める場合がある
- ④ 受賞作品の出版権などの諸権利は星槎国際高等学校に帰属する

編集後記

編集長 天野 桂一

星槎オリエンティックに文芸創作活動を得意とする生徒たちの活躍の場面として星槎文芸大賞が創設されて、今年で早くも十回目の開催となりました。今年度は、六つの部門に計八九八点の作品が寄せられ、各校で選考された二八作品が集まりました。どの作品も、生徒のみなさんの瑞々しい感性によって紡がれた甲乙つけがたい作品ばかりで、審査員の先生方も選考に苦慮された又何つております。

今年度も特別審査員の伊藤玄二郎先生（かまくら春秋社代表取締役・星槎大学教授）のご配慮により文芸誌『詩とファンタジー』にて受賞作品を誌上発表していただき、著名な先生方からの講評を賜りました。また、俳句部門の生徒会特別表彰には、全国の生徒二〇二五人から投票いただき、文芸作品を通して関わり合い、共感理解を深めていくことが出来たのではないかと思慮しております。

応募作品は、生徒ひとり一人の日常生活の中で出会った様々な驚きや感動が伝わってきます。感じたことや思ったことは瞬で過ぎ去ってしまいます。しかし、言葉や文字にすることでその感動や思いはこの世界に縫い留められ、周囲の仲間へ伝えられていくのだと考察します。

先日、詩人の谷川俊太郎さんがお亡くなりになったとのニュースが報じられました。九十二歳でした。詩人として「生きる」や「朝のリレー」などの作品を目にしたことがある方も多いでしょう。谷川俊太郎さんの作品は世代を超えて親子で共有できる感動をもたらし、本文芸大賞からいっつか、谷川俊太郎さんに続くような文芸作家が現れてくれることを望みます。

末筆ながら、本作品集刊行に至るまでご協力いただきました、伊藤鉄也実行委員長をはじめ、各委員の先生方、各校舎ご担当者様、誠にありがとうございました。そして素晴らしい作品をエントリーして頂いた生徒の皆さんに御礼申し上げます。来年度もより感性を発揮した作品がエントリーされることを楽しみにしています。

編集委員

監修 伊藤 鉄也（文芸大賞実行委員長）

- 編集長 天野 桂一（星槎国際高等学校福井学習センター）
委員 加藤 憲司（星槎国際高等学校芦別学習センター）
委員 脇屋 洋子（星槎国際高等学校横浜鶴居学習センター）
委員 山口 貴志（星槎学園高等部大宮校）
委員 大平奈美佳（星槎国際高等学校沖縄学習センター）

星槎文芸大賞 令和六年度 受賞作品集

令和七年一月二三日発行

編集者 前田 豊

発行者 星槎国際高等学校

〒〇〇四一〇〇一四

北海道札幌市厚別区もみじ台北五丁目二二一

TEL 〇一一八九九一三八三〇

FAX 〇一一八九九一三八三五

印刷

（株）横浜綜合写真

令和六年度 受賞作品

【最優秀賞】	小説 「電柱と人間」	星槎国際郡山 一年 矢内 那奈	2
【優秀賞】	短歌	星槎国際仙台 一年 木村 快路	12
【優秀賞】	俳句	星槎学園高等部湘南校 二年 村越 陽菜	12
【優秀賞】	小論文 「一括りにせず、傾向にとられないこと」	星槎国際川口 一年 新井 杏里	13
【審査員特別賞】	詩 「ぼくより小さい君は」	星槎名古屋中学校 三年 山口 大翔	14
【星槎大学長賞】	エッセイ 「勇気を出して」	星槎国際大阪 三年 三杉 遙翔	14
【星槎道都大学長賞】	エッセイ 「私の背中をおしたことば」	星槎国際福井 二年 上山 祐佳	16
【部門賞】	小説 「鎮痛の炎」	星槎国際立川 三年 室田梨沙子	17
【部門賞】	小論文 「考え続けること」	星槎国際浜松 二年 村松 彩	26
【部門賞】	エッセイ 「みんな、元気で」	星槎国際名古屋 専攻科 三年 久米 弘記	28
【部門賞】	詩 「十六時の陽炎」	星槎学園高等部大宮校 一年 宮崎菜々子	30
【部門賞】	俳句	星槎国際立川 三年 原島 知紀	30
【部門賞】	短歌	星槎国際立川 一年 武者 静夜	30
【生徒会特別賞】	俳句	星槎国際浜松 三年 堂本 柚衣	31

は思った。そうして離れていく子供達を眺めていた。そして次の日の朝になった。引越しの時間は朝だったから、もうすぐ昨日の子がお見送りの為にこの辺を通るだろう。

数分後に私の予想どおり走ってあの子の友達を通り過ぎて行った。ちゃんと手紙を渡して見送れたかな、とか考えていると電信柱38と電力柱221の声が出た。

「ねえ、これ手紙落としていつてない？まずいよね、渡せないじゃん」

「自分達には関係ないじゃないか。」

下を見ると私のそばに手紙が落ちていた。急いでいる様子だったのでうっかり落としてしまったのだろう。

それから数時間たってあの子の友達の手紙を探しに戻ってきた。必死に探していたが、夕方になり暗くなってきたので諦めて帰ってしまった。

その日の夜私は何とか手紙を届ける方法は無いか考えていたが、いつの間にか知らない場所に来ていた。周りを見渡すと輝く何かが浮遊して居たりして、かなり非現実的な場所に居ることが分かった。そして下を見ると地面は無かった。私は浮いている事に気が付いた。最初は物凄く驚いたが、ありえない事ばかり起きているので、夢だと考えることにした。

ここでは想像通りに滑るように移動できた。初めての感覚でとても面白いと思った。

「嫌だよ。人間の為に行動するなんて面倒だ。第一場所とか分からないし。」

「場所に関しては地図を渡す。お金もこちらで準備してあるからそれで公共交通機関を利用してくれ」

「分かったけどさあ、それ一人でやるの？絶対大変じゃん」

「さすがに大変だろうし、お前は人間に対して何をするか分からないから、監視役も兼ねて近くに建っていた電波塔も人間にして同行させることにした」

「やった、全部電波塔にやらせればいいじゃん」

「これはお前に頼んだ仕事だ。電波塔には手紙に触れることができないようにしてある。電力柱に戻りたいたら自分で届けて来い」

「分かったよ、人間なんかの姿でいたくないから届けてくるよ」

「やっど行く気になったか。それじゃあお前は先に元の場所に戻ってもらおう」

建造物の神がそう言うのと電力柱221は消えていた。

「おい、その電波塔」

「あつ、はい、なんでしようか」

突然、建造物の神に呼ばれ驚いた。電力柱221を人間に変えたりしていたので本当に神様なのだろう。怒らせたらどうなるか分からないので私は丁寧に返事をするようにした。

「勝手に同行させることにしてしまっして申し訳ないね

そしてしばらくこの場所をさまよっていると、電力柱221と〇〇町では見かけない変な格好をした人間のようなものを見つけた。何か会話している様だ。

「上から見ているが電力柱221、お前の態度は横暴すぎる。周りの電柱達だって困っているぞ」

「突然何？なんか知らない場所に連れてこられてるし。早く元の場所に返せよ。それに誰だよ、偉そうだなあ」

「私は建造物の神だ。常に態度が悪く電柱達を困らせているお前に少し罰を与えに来た」

「建造物の神ってなんだよ。どうせ自称だろ。罰も大した事じゃないんだろ」

「電力柱221、お前をお前の大嫌いな人間にしてやろう。それが罰だ」

「人間にできるわけないだろ。どうやるんだよ」

本当に神なのか分からないし電柱を人間にするなんて無理だろうと私も思った。だが次の瞬間、電力柱221は人間に変わっていた。私はとても驚いた。電力柱221はとても怒っているようだ。

「本当に人間になってるんだけど。どうやったんだよ。」

「そんなに戻りたいか。なら仕事をあげよう。今日の朝、引越してしまう友達宛の手紙の落とし物があつただろう。それを引越していった人間に届けてこい。それができたらもとの電力柱にもどしてやろう」

え」

「大丈夫ですよ。手紙をどうにか届ける事は出来ないか考えていた所だったので嬉しいですよ」

「そうか、それは良かった。電力柱221の監視を頼んだぞ」

「はい。頑張ります」

「それじゃあ君にも元の場所に戻ってもらおう。目が覚めたら人間になってるぞ」

そう言われるとだんだん辺りが暗くなっていき、いつの間にか眠っていたようだ。

次の日、目を覚ますと凄く視点が低くなっている事に気が付いた。下を見ると手足が生えていた。本当に人間になってる。私は電柱に寄りかかって眠っていた。隣には手紙を持っている、多分電力柱221であろう人間が眠っていた。起きる気配が無いので起こす事にした。

「おい、電力柱221。早く手紙を届けに行こう」

私が声を掛けるとやっど起きてくれたようだ。目を覚ました電力柱221は、視点が低くなったことに驚き辺りをしばらく見回していたが、夜にあつた事を思い出し状況を理解したのだろう。電力柱221は騒ぎはじめた。

「どういう事だよ。ただの夢じゃ無かったのか？本当に手紙届けなきゃいけないのかよ。それに突然起こしてきて、お前誰だよ。」

「私はその電波塔だよ。建造物の神様が言っていた

だろ、電波塔も同行させるって」

「そんな事言っていたか？まあ、それなら丁度いい。手紙やるから俺の代わりに届けてきてくれ」

そう言うとき電力柱221は私に手紙を押し付けてきた。電力柱221は建造物の神の話をちゃんと聞いていなかったようだ。確か私は手紙に触れなくなっているはず。押し付けられた手紙は予想どおり私の手をすり抜けて地面に落ちた。

「私は建造物の神様に手紙には触れられないようにされたんだ。電柱に戻るには電力柱221が行くしかないんだよ。私も手伝うから行ってこようよ」

「確かにそんなことも言っていたか？分かったよ。面倒だけど行くよ」

電力柱221はやつと行く気になったようだ。建造物の神は確か地図とお金を渡すと言っていた気がした。その事について電力柱221に聞いてた。

「何も持っていないな。いや、ポケットに何か入っている」

そう言うとき電力柱221は、ポケットから地図と数枚のお札が入った封筒を取り出した。地図を広げてみるとどこかの住所を書いた付箋が貼ってあった。おそらくあの子の引越先だろう。

「△△町の△マンション×号室に向かえばいいようだ」

「凄く遠いなあ。これ本当に行けるのか？」

「建造物の神は、公共交通機関を利用してと言っている」

たから電車やバスを乗り継げば着くと思うよ」

「何か面倒そうだな。とりあえずどこに向かえばいいんだ？」

「地図を見た感じ△△町は上の方だから電車に乗って上を目指そう。確かこの辺に駅があると聞いたことがある。そこから電車に乗ろう」

私達は、とりあえず地図を見ながら駅に向かうことにした。

駅を目指して歩いていると小学校が見えてきた。きつとここがよく見かける子供達を通っている学校だろう。普段は上からしか見られないので、近くで見ると壁に模様があり色々な発見が出来て、人間として過ごすのも楽しいなと思った。だが隣を歩いている電力柱221は凄く不満そうだった。人間にされた事が相当嫌なのだろう。

小学校から少し歩くと駅に着いた。そうして数分後に着いた電車に乗り込んだ。それから色々あって、最後に乗った電車では終点だとアナウンスされた。

「電力柱221、ここで降りるよ。」

「やつと着いたなあ。もうすぐ夜になりそうだが大丈夫か？夜はどこで過ごすんだよ。人間は地面に刺さっているわけにはいかないんだろ」

「まあ、お金はあるしどこかに泊まれると思う。降りてから考えようよ」

電車が停車したので降りてみたら思ったよりも田舎の駅だった。泊まる場所があるのか不安になって

たら電力柱221に話しかけられた。

「ここ結構田舎っぽいけど泊まれる場所はある？それにお腹がすいてきた、人間って何食べて生きてんだ？」

「食べ物を買に行こうか。お店を探そう。」

そうしてお店を探してしばらく歩いていると明るい小さめの建物を見つけた。〇〇町にもあった気がする。確かコンビニという名前だったはずだ。結構暗くなってきたので、ここで夜ご飯を買うことにした。

「電力柱221、夜ご飯はここで買おう。お金は後、どれくらい残ってる？」

電力柱221から返事は無かった。何か焦っている様子だ。

「どうしたんだ？」

「お金を入っていた封筒が無いんだ。手紙はあるんだけどなあ。おかしいな、切符買った時はあったのに」

「どこかに落としたんじゃないか。とりあえず探そう」

「ええ、嫌だ。お腹空いたし動きたくない」

「お金が無いと移動も大変だから探さないとだめだよ」

「はいはい。分かったよ。探すよ」

私達は落としてしまったお金を探すために来た道を戻す事になった。だが夜になって暗いものもあり中々見つからなかった。それからしばらく探しても見つからないので、私達はその辺の草むらで休んでいた。

「この状況、大丈夫なのか？」

「とにかく探そう」

そんなことを話していると、なにかが聞こえてきた。なんの音だろうか、と思えば人の足音だった。おじいさんがこっちに近づいてきていた。そして、おじいさんはこちらに気づいて話しかけてきた。

「この辺では見えない人達だねえ。こんな夜に家の近くで何してるんだい」

「すみません、色々あって△△市を目指していたのですが、途中でお金を無くしてしまいました。少し休んでました」

「そうかい、それは大変だったねえ。泊まる場所もないだろう。家に泊まっていくかい？」

「良いんですか？良ければそうさせて頂きたいです」

「分かったよ。家はこの近くだからついておいで」

「ありがとうございます。電力柱221もお礼を言いますよ」

電力柱221にお礼を言うように言ったが無視されてしまった。電力柱221の態度についておじいさんに謝ったが、おじいさんは特に気にしておじいさんらしい。おじいさんの家へ向かう途中、私は小声で電力柱221に話しかけた。

「電力柱221、後でちゃんとお礼を言うんだよ。あと、泊めてもらうのだから失礼な態度をとらないように気を付けるんだよ」

「なんでお礼を言わなきゃいけないんだよ。どうせ偽

善ってやつだろ。人間は氣遣いの無い嫌な奴ばっかりだよ」

「それは〇〇町の電柱の周りにいた人の話だろう。大体はわざとじゃないし、前も言ったが私達は建造物なんだ、私達に対して氣遣いが無いのは当たり前なんだよ」

そんな事を話しているとおじいさんの家に着いたようだ。おじいさんに言われ家に上がるとおばあさんに出迎えられた。おばあさんは、おじいさんが知らない人を二人も連れて帰ってきて驚いている様子だったが、おじいさんが事情を説明してくれたようで、すぐに歓迎してくれた。

その後は、おばあさんに晩御飯を用意すると言われテーブルの近くに座って待っていた。

しばらくしておばあさんが晩御飯を運んできた。お米とお味噌汁と焼き魚だろう。本物を見るのは初めてだけど、いい匂いがして美味しそうだった。すぐに食べ始めるのは失礼だと思い、私はまずお礼を言った。

「とても美味しそうです。泊めてもらうのに、晩御飯まで用意して頂きありがとうございます」

「質素な晩御飯でごめんなさいねえ」

「全然そんなことないです。いただきます」

食べてみると凄く美味しかった。電力柱221も意外と美味しいと言っていたが、私よりも食べ終わるのが速かったので気に入ったようだ。

「待ってて」と言い何かを取りに行った。おじいさんも見送りに来てくれたようだ。

「お財布とリュックサックだよ。あげるからお金とか無くさないように、これで持っていきな。頑張っねえ」

「本当に色々ありがとうございます。電力柱221もお礼を言いますよ」

「ありがとう」

電力柱221も嫌々だがお礼を言った。そして私達はおじいさんとおばあさんに見送ってもらい出かけて行った。おばあさんがくれた財布にお金を移して、それをリュックに入れて私が持っていたが、手紙も入れた方が無くさなくて安全だと思った。私は手紙に触れないので、電力柱221に手紙をリュックに入れ、背負うよう頼んだ。拒否されるかと思っただが文句は言いつつリュックを受け取ってくれた。

それからしばらく歩いてるとバス停があった。「これバス停じゃん。疲れた。もう歩きたくないからバス乗って行こう」

「これ乗って大丈夫なのか。知らない場所につれて行かれるかもしれないから、ちゃんと確認した方が良くと思うよ」

「ほら、もうバス来てる。早く乗ろう。多分大丈夫だよ。」

そう言って電力柱221はバスに乗り込んでしまったので、私も急いでバスに乗った。途中で違和

「とても美味しかったです。ありがとうございます」

「そう言ってもらえると嬉しいねえ。気になっているんだけど、あなた達はどこから、何しに来たんだい」

「事情があって、手紙を届けるために〇〇町から、△町へ向かっているところです」

「お金を無くしたって聞いたけど大丈夫かい？」

「封筒に入れていたんですが落としてしまったみたいです。残りは、徒歩で行けない事は無い距離なので何とかなると思います」

「交通費くらいなら貸すけどねえ」

「申し訳ないですよ。返しに来れるか分からないですし」

「そうなのかい？」

そんな会話をしてからおばあさんが用意してくれた、部屋と布団で快適に眠った。

次の日朝起きて寝室を出ると、既に朝ご飯が用意してあり、おじいさんが居なかった。おばあさんに聞いてみるとおじいさんは散歩に出かけているらしい。先に朝ご飯を食べているとおじいさんが帰ってきた。おじいさんは私に封筒を渡してきた。よく見ると無くしたお金を入れていた封筒だった。

「お金を封筒に入れていたと聞いて、もしかしてと行って持って来たけど君たちのかい？」

「そうです、ありがとうございます」

そして朝ご飯を食べ終わり、私達はそろそろ出ていく事にした。おばあさんにそのことを伝えると、「少

感を覚えて、地図で確認してみると△△市とは別の方向に向かっていることに気が付いた。急いで降りるボタンを押したがもう遅かった。結構遠くに連れてかれていた。とりあえず電力柱221に△△町から遠ざかっていることを伝え、バスが停車したら急いで降りた。

「これどうするんだ。まさか歩いて戻るのか？」

「しょうがないだろう。君が勝手にバスに乗ったんだ」

「確かにそうだな。分かったよ、歩いて戻ろう」

電力柱221の聞き分けが良くなった気がした。今回の事はさすがに自分のせいだと理解したのでらうか。

それからしばらく歩いたが元の場所に戻るどころかだんだん木が増えていき、風景が森っぽくなり遠ざかっている気がしてきた。車もほとんど通らない。

「これ本当にあっているのか？疲れた。休みたいな」

「多分あっていると思うが、少し休もうか」

そしてしばらく道の端で座って休んでいた。すると突然通りがかった車が近くで止まり、乗っていた人が降りてきた。若い女性だった。こっちに近づいて、話しかけてきた。

「こんなところで座って大丈夫？怪我でもしたの？」

「大丈夫ですよ。さっきまで歩いていたので、休んでいるところなんです。ありがとうございます」

「ええ？この辺歩いていたの？この辺本当に何も無いよ。どこに向かっているの？」

「△△町に向かっています」
「歩いて行ったらかなり遠いよ。今からだと夜になっちゃうよ。私が向かっている方向と同じだし、送って行ってあげようか」

「ありがとうございます。良ければお願いします。」
申し訳ないと思っただが、また夜になると泊まる場所を探したり色々大変なので、車に乗せてもらう事にした。車に乗ると快適だった。

「本当にありがとうございます。電力柱221も、お礼を言っておこう」

「またかよ。ありがとう。」
「そんなに嫌そうにお礼を言うんじゃないよ。すみません」

「いや、別にいいけど。電力柱221って何？あだ名？変わってるのね」

「そんな感じですね」

よく考えたら人間は番号では呼び合って無かった気がする。電柱と電波塔だとばれてしまうかもしれないと思っけど、別にばれても問題は無い。それに自分は電波塔だ、と言っても本気になる人はいないだろう。

「君たちは△△町に何をしに行くの？」

「手紙を届けに行きます」

「へえ。切手を貼って郵便ポストに入れておけば届くの、自分の足で届けに行くのか。君たち変わってるね。何か深い事情がありそうね」

「やっと戻れるのかあ。長かったなあ。本当に大変だったよ」

「そうか。私はもう少し自由に歩いていたら良かったな。」

「ここに来るまでに会った人はみんな親切な人だっただろう。君の言うような悪い人ばかりではない事は分かったかい」

「まあ、少しわかった気がするよ」

そんなことを話しながら歩いてみると、△マンションという看板が見えてきた。

「あそのマンションに手紙を届ければ終わりだね」

「そうだな。確か×号室だったよな。早くポストにも入れてこよう」

私達はマンションの階段を上り×号室へ向かった。そして×号室の前に着いた。

「よし。手紙を入れるぞ」

「これって手紙を入れたらその瞬間に電波塔に戻って○○町に返されるのかな？」

「あの神様の事だ、電車とバスで帰れとか言ってくるかもしれないな」

そんなことを言いながら電力柱221は手紙を郵便受けに差し込んだ。

すると辺りが暗くなりはじめ、建造物の神と出会った時の、非現実的な場所に着いていた。そこには建造物の神様が居て私達に話しかけてきた。

「手紙を無事届けられたようだ。約束通り電柱と電波塔に戻してやろう」

それからしばらく、どこから来たのかとか、趣味の話とかで、結構会話が盛り上がった。電力柱221は会話に混ざる気はないようで、眠っていた。それから少したって声がかかった。

「もうすぐ△△市に着くよ。電力柱221くんのこと起こしておきなよ」

「分かりました。」

私は、電力柱221を起こして降りる準備をはじめた。

「△△市にはいったからその辺で降ろすね。片方が電力柱221っていう事は分かったけど、君はなんていうの？」

「電波塔だ」

電波塔と名乗るのは人間からしたら変なのかと思、私は何とこたえるべきか悩んでいると、電力柱221に言われてしまった。

「へえ。君たち建造物みたいだね。建造物に憧れてたりするの？まあいいや。この辺で止まるから降りてね」

「分かりました。本当にありがとうございます。」

「ありがとうございます」

電力柱221が自分からお礼を言えた。成長したなあ、と思った。

「こちらこそ二人ともありがとう。楽しかったよ」

そう言う窓は閉まり、車は離れて行った。

「電力柱221、後は徒歩で着きそうだよ。」

「やっと戻れるのか。早く戻してくれよ」

電力柱221は早く電柱に戻りたいようだが、

私は戻る前にやりたい事があった。

「電波塔に戻る前に、おばあさんに頂いたリュックと財布を返しに行きたいです。多分電波塔に戻ったら持っていることは出来ませんよね？」

「確かにそうだな。ワープさせてやるから、返しに行ってきた方がいいぞ」

「ありがとうございます」

「電力柱221、お前は先に電柱に戻って帰るか？」

「いや、俺も行く」

そうして私達は建造物の神様に、おばあさんの家の前につれて行ってもらった。おばあさんの家の前に着くと、おじいさんが帰ってきた所だったように声を掛けられた。

「帰るところかい。手紙は届けられたのかい？」

「ありがとうございます。みなさんのおかげで無事手紙が届けられました。」

おばあさんもいつの間にか、近くにいたようだ。

「手紙届けられたのかい。良かったねえ」

「借りた、リュックと財布を返しに来ました。ありがとうございます」

「わざわざ返しに来てくれたの。持ってきてくれて良かったのねえ」

そんな会話をして、最後に二人でお礼を伝えてお

ばあさんの家を離れて行った。

すると、また辺りが暗くなりはじめ、いつの間にか眠っていたようだ。目を覚ますと朝になっていた。そして視点がかなり高くなっていることに気が付いた。下を見ると手足は無くって、電波塔に戻っていた。電柱達には凄く心配されていた。電柱達に人間になって旅をしてきたことを伝えると、とても興味を持ってもらえた。電力柱221も大変だったと文句を言いながらだが、楽しそうに旅での出来事を話していた。電柱達も電力柱221の話を楽しんで聞いていて、仲良くなるのが出来たようだ。それから数週間たったが、電力柱221の人間への文句も減り出電柱達みんなで仲良く暮らせている。



「山形鉄道フラワー長井線」
中野 陽太 (星槎学園高等部大宮校2年)



夕焼け
大須賀れい (星槎国際浜松2年)

【優秀賞 短歌部門 受賞】

凍える夜 雷鳴響き 泣く赤子
大雨拭うは 親の温もり

一年 星槎国際仙台
木村 快路



【優秀賞 俳句部門 受賞】

車窓から ラムネみたいな 空と海

星槎学園高等部湘南校
二年 村越 陽菜



【優秀賞 小論文部門 受賞】

「一括りにせず、
傾向にとられないこと」



星槎国際川口
一年 新井 杏里

ジェンダー平等を達成するにあたって大切なことは「一括りにしない」ということだ。現在、「多様性」や「ジェンダー」という言葉が世間に染み渡り、よく耳にするが、私はとても難しい社会問題だと感じる。なぜならば、体のつくりや、脳の仕組みなど、明らかに男女で違いはあるからだ。違いがあるのに、同じ立場で対等に接することが出来るのだろうか。

そんな中、ジェンダー平等を達成するために大切なことは、「一括りにしない」ということである。なぜなら、同じ性を持つ人でも、全く別の人間であるため、人によって全く違う意見をもっているのだ。それにも関わらず、「男だから」「女だから」と一括りにするのは、個々の人間として関わる幅を狭めてしまっている、それは人との関わりの中で最も不甲斐ないことだと思う。

だが、冒頭で「明らかに男女で違いがある」と述べたが、体のつくりはもちろん、脳の仕組みに関しては、「男女で違う傾向がある」ということだと思う。たとえば、私は保育のアルバイトをしており、子ど

もたちは自由遊びの時間になると、女の子はおままごとで遊び、男の子はプラレールで遊び始める子が多い。だが、これはあくまでも「傾向」であり、おままごとをする男の子も、プラレールで遊ぶ女の子もいる。まだ周りの目を気にしたり、〇〇であるべき、などといった多くの概念が構成されていない素直な子どもが選んだものにも、このように男女で全く違う傾向があるというのには、とても興味深く、やはり生まれながらに男女で違いはあるのだと強く感じた。

他にも男女では多くの違いがあり、さまざまな「傾向」も分かれるが、元々は同じ人間であり、「傾向」があるだけで、一人ひとり違う意見をもっている。そして、性別関係なく、まったく同じでない限り必ず対立は起きるものだ。そんな時こそ、性別のフィルターを通さず、一人ひとりの人間であることを忘れないでいて欲しい。そして、互いに理解し合おうとする姿勢で接していくべきなのだ。



「無題」
二階堂倅穂 (星槎国際厚木1年)

【審査員特別賞 詩部門 受賞】

「ぼくより小さい君は」

星槎名古屋中学校
三年 山口 大翔



ぼくより小さい君は
いつも元気でいつもうるさい
ぼくが歩けば君がくっついて歩く
ぼくがすわれば横にすわる
ぼくは君のことが少し苦手
ぼくが好きなリングアめを
君はきらいなのに君は
一口ちようだと食べた
笑顔でおいしいと食べる君を
かわいく見えた
「おかわりちようだい」
「いいよ」
「おいしいね」



「燈(ともしび)」
伊藤 雅哉(星槎国際帯広3年)

【星槎大学長賞 エッセイ部門 受賞】

「勇気を出して」

星槎国際大阪
三年 三杉 遙翔



「バタン」と何かが倒れる音が鳴った。それはコンビニのアルバイトでレジに立っていた時だった。きつと他の従業員の人が何か落としてしまったんだろう。そう思い店の中を見渡したとき、私は異変に気が付いた。店にいる誰もが目を見開いて一点を見つめていたのだ。私は、皆が見つめる先に行った。
そこには、人が倒れていた。50〜60歳くらいの男性。うつ伏せになっていて、呼吸はしているものの立ち上がる気配はない。私は何か声をかけた方がいいと思った。けど僕の体は何か縛られてしまったかのように固まって動かなかった。何があったのかかわからず怖くて、勇気が出なかったのだ。
私だけじゃどうしようもできない。そう思った私は走ってバックルームに行き、そこに居た先輩のTさんに声をかけた。
「Tさん。店の前で人が倒れてて。」
「え、？」
その時、いつもはニコニコしているTさんが、強ばった表情になった。そしてすぐに、Tさんは店の

前に倒れている人の方へ向かった。

それからのTさんの行動に、私はただただ見惚れていた。倒れている人の意識の確認、周りの人へ救急車要請のお願い。それから所持品から名前を確認し「○○さんのご同行の方いらっしゃいませんか!!」と店の中と店の外を走り回って呼びかけたり。急に起きたハプニングなのに、なんの躊躇いもなく淡々と行動するTさんがすごかった。ただそれと同時に、勇気がでなくて何も行動できなかった自分に對して不甲斐なさを感じた。その後、救急隊がかけつけるころには、倒れた男性ははっきりと会話ができる状態になっていた。

事態がひと段落した時、「さっきはありがとうございました。僕どうしたらいいかわかんなくて、なんにもできなくてすみません。」と頭をさげながらTさんに話しかけた。するとTさんはいつものニコニコした顔に戻って、「こちらこそありがとう、謝る必要ないで。困ったときに一人で解決しようと思わず、周りに助けを求める事って勇氣あることやと思う。恥ずかしいって思ったりするから大人でもなかなか難しいねん。けどそれを三杉君がしてくれたから助かったわ。その行動に自信持つてな。」と言ってくれた。褒められると思つてなかった僕の頬が緩んだ。そして、助けを求めることも勇氣なんだということにはじめて気がついた。

時には助けを求めることが恥ずかしいこともある

し、うまくできない自分に不甲斐なさを感じることもある。けれどそんな時はTさんのことが背中を押してくれる。一人で抱え込まず時には助けをもとめる、私はそんな人になることをこれからも目指す。



「瑠璃色の白昼夢」
荒木 麻鈴(星槎学園高等部北斗校3年)



「ポップ可愛い星槎ロゴ!」
下川 穂花(星槎国際甲府2年)



「星空」
傳馬 昂輝(星槎国際本部長1年)

「私の背中をおしたことは」



星槎国際福井
二年 上山 祐佳

私の背中をおしたことは、「自分の好きな服を着て、好きなものを食べて、やりたいことをしている自分が1番素敵でかわいい」です。

私はもともと素の自分があまり好きではなく、周りの目に少しでも綺麗に映るような服装や立ち振る舞いが大切だと考えていて、自分の好きな物ややりたいことなどは二の次でした。そのときの私は、周りの人が自分に対して違和感を感じないことが1番良い事だと考えていて、自分自身もそれが心地よく、安心できることだったのです。

しかし、ある日SNSを見ていた私は、とある文を目にします。それは、二十代くらいの女性が自分の写真とともに、「結局自分の好きな服を着て、好きな物を食べて、やりたいことをしている自分が1番素敵でかわいい♡取り繕ってもいつかは綻びがでるんだから、ありのままの自分を好きになってもらった方が人生100倍楽しくなる！」という文章を投稿したものでした。その文章を見たときの衝撃は今でも忘れません。私は今まで、心のどこかで、自分のことをかわいい、

「鎮痛の炎」



星槎国際立川
三年 室田梨沙子

SNSのプロモーション広告に書かれていた文字は、継人にとつてあまりにもうまい話であった。

大抵の場合SNSの広告は、わかりやすい写真や資料を中心に、専門のデザイナーが文字の配置や写真の配置を決めて、人々の関心が向きやすいベストな形をとられることが多い。しかし継人が惹かれた広告は、無地の白い背景に黒い明朝体というあまりにもシンプルな構成で、こう書かれていた。「痛くありません、サツとこの世からおさらば！」

コインランドリーというものは、店舗によっては深夜に営業している場合もある。しかし広告のコインランドリー内には、人の気配はおろか、明かりさえついていなかった。そして営業をしている様子も、まったくもって見られないのである。雨水や泥で汚れた看板は「ランドリー」という文字だけは見えたが、それ以外は破損している。継人は一歩、そしてまた一歩と店内に近づく。道路沿いに向けてガラス張りになってからる店は、中の様子を見ても営業をしなくなっ

かっこいいと思うことは自意識過剰で恥ずかしいことだと感じていました。しかし、あの投稿を見てからは、自分のことをかわいいと思っていいたんだ、自分の好きなことを大切にしてみよう、と思い始めました。それからは、自分のなりたいたい自分になれるよう、真剣に服を選んだり、メイクの練習をしたり、とにかく自分がしたいことだけをする日を作ったりと、自分に合う時間を多くとるようにになりました。そうするうちに、新しい自分と出会えたり、自分のことを好きになることはとても楽しいことだと気づくことができて、とてもいい経験になりました。

傍から見れば、ただのナルシストに見えるかもしれませんが。あの投稿を見る前の私が今の私を見ても、きっとそう思うでしょう。また、あの言葉は私一人に向けられたものではなく、誰かの背中をおす意図もなかったと思います。しかし、あの言葉は私を大きく変えてくれて、私の人生をより豊かなものにしてくれました。絶対に自分を好きになる必要はないけれど、今の自分が嫌いな人、自分に自信が無い人には、あの言葉を伝えたいです。私が背中をおしてもらえたように、今度は私が悩んでいる人にあの言葉を伝えて、その人が一歩踏み出せたらいいなあと思います。

なりの時間が経っているように見えた。店内は誰かが飲んだ後のチューハイの缶がたまに転がっているだけで、埃や蜘蛛の巣が張っており、どうしても放置されている印象を受ける。一度周りを見回してから、人目を気にするように店内に入った継人は、その淀んだ空気に、胸がさらに潰れそうになる。そして人のいない店内に入ってから、何かに見られているような、そんな感覚が継人の背筋を歩いている。

「……んだよ、なんだよ！ やっぱ釣りかよ！」
嘘を吹き込まれたと感じた継人は、人目がないことをいいことに、行き場のない憤りを転がっていたチューハイの缶に当たる。百円シヨップで売られているサンダルは、アスファルトの形でさえ足に伝わるほど作りが甘い。継人はチューハイ缶を踏みつけたが、元々変形していたその缶の尖った部分を踏みつけてしまい、ひどい痛みを足の裏に負った。

「いつてえ……」
「ひいッ！ 絶対痛い！ 痛い！ 見てるだけで痛いッ！」

深夜に似合わないような明るい異様な声に、継人は振り返った。
「皿、出てませんか？」
近くの高校の女子生徒の制服が継人の視界にはま

「ワタシが原因ではありますけど、ワタシとしては物に当たるのは正直想定外なんですよね？」

「どうやらチューハイ缶を所持していたのは彼女のようだ。高校生なのに飲酒しているとは、こんな時間に出歩くのも納得である。どんな顔をしているのか、継人はまた顔を上げる。」

コインランドリー、もとい継人の実家に近い高校の女子の制服は首から下の話だ。しかし、首から上。つまり頭。頭は、女子の制服にはとても似合わない姿形をしていた。

月光をわずかに受け止める銀色の防災頭巾を被り、顔の部分は見えないほどの業火であった。

目を疑う。

しかし本来防災頭巾を被る際の顔の位置にぼうぼうと、めらめらと、揺れる炎が確かにあった。

「アナタが何をしに来たのか知らないですけど……えー!？」

「おおよその世のものでは無いことはわかる「彼女」を見て、継人は涙を流していた。この世からおさらば!」の文言に釣られた通り、最近芽生えてしまった希死念慮に苛まれ、数ヶ月前に空になったはずの子供部屋に戻った彼は、キャパオーバーを起こしていた。

「泣いてます!?! めんどくさい! どうしよう、背中とかさすればいいですか? あ、ちよつと待ってくださいね、今頑張りますから」

かがいる、そんな感覚が継人を襲う。

「広告って?」

彼女が継人に聞き返す。様子がおかしくなった継人を気にしないような素振りであった。

「し、死なせてくれるって」

「なるほど? ワタシならたぶん、それぐらい出来ません」

彼女は炎を一回り大きくさせて、継人に手を差し出した。

「アナタ、こちら側に来てくれる人だったんですね。最初から言ってくださいよ」

継人は上手く回らない頭を頑張って回す。口ぶりから彼女はおそらく、既に死んでいる存在だ。継人は何もかも伸びきった手を彼女に預け、情けなくも彼女が立つことを手伝う形となった。

「ああ言い忘れてました、ワタシはモモです。この先は同じ『怨霊』同士、仲良くするのですから、アナタもぜひワタシに名乗ってくださいね」

「それではもう一度いきますよ!」

モモは正面から継人の肩を掴んで、力を込める。

しかし、何も起らない。

「そ、そんな顔しないでください! すぐにワタシが霊にしてさしあげましょう。……お待たせしました、では! ふんっ!」

やはり、何も起らない。

首から下は女子高生、首から上は炎と防災頭巾の

言葉こそ正直なもの「彼女」は、彼女の頭の炎を見たまま涙を流し始めた十九歳の男性を心配しているようだった。

「嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い!」……よしこれでいいでしょう。……あのう、そんなに痛かったんですか? 背中さすります? ワタシが出来ることは、それだけなんですけど」

「い、いや大丈夫です、すいませんした、出てくんで」
継人は震え出した手足を必死に動かして、コインランドリーから離れようとする。

「えーっ!? なんですですか! ていうかなんでここに来てくれたのかとか結構聞きたいんですけど」

「這いつくばりながらコインランドリーを去ろうとする継人に、彼女は腰に手を当ててわかりやすく怒った。」

「なんでって……!」

今思えば、あの広告は目の前にいる明らかにこの世のものではない存在によるものだったのかもしれない。

「広告を見て来たんだっしゅうわ、ああ……!」

広告。その言葉を出した途端、腰から首までを撫でられたかのように寒気が伝う。継人はコインランドリーの大きなガラスの壁に背中を寄せる。

見られている。確実に、誰かに、見られている。目を大きく見開いて、瞼を思い切り持ち上げて、見られている。自分のことを穴があくほど見ている誰

怨霊「モモ」は、休学中の引きこもりピギナー大学の継人をなんとか「呪い殺そう」としていた。

モモの手を借りて立ち上がり、落ち着きを取り戻した継人は、見た広告の内容をモモに話した。モモはそれを「呪殺」のことを指すと断定し、先程の流れに至る。

モモは語った。

既に自分はこの世のものではないと。

モモは話した。

先程のように「嫌い」の感情を多めに出すと、この世のものに触ったり、幽霊らしいことが出来るようになる。

しかしモモはこのようにも嘆いた。

「やはりワタシの調子が落ちてきていますね……実を言うと最近のワタシは、怨霊というのは名ばかりというような感じで、何かを忌み嫌うやり方を忘れちゃったんですよ」

「話が」

「アナタが諦めても、ワタシは諦めませんよ。アナタにはさっさと『こっち』に来て、ポルターガイストで空き缶潰し修行に付き合ってもらいます」

先程の変形したチューハイ缶も、モモの「幽霊らしいこと」を再び出来るようにする練習の成果だったらしい。

「いや、もういいんで……!」

「アナタが良くてもワタシは良くないのです、やっ

仲間が増えそうなのに逃すわけないじゃないですか」
モモはこれだから嫌だわ、という風に継人の肩から手を離す。先程から肩もみのような触り方で継人のことを呪おうとしていたが、継人はそんなモモのやり方を疑っていた。

「……なんか少し頭が冷えてきたし、家帰ります」
「ちょ、ちょ、待って……あつ！ また明日！ また明日来てください！ 来るまでに遺書とか書くんですよ。絶対来てくださいね！ さもなくば、来ないと、来ないとすねー！」

継人はコインランドリーのドアを勢いよく閉めた。そして振り返ると、あの異形な怨霊の姿は見えず、あのクラスの騒がしい女子のような声も聞こえなくなっていた。そして辺りには誰もいないはずなのに、またも再び現れた無数の人間から視線を浴びているようにたたまたまれなさや窮屈さを継人の輪郭をなぞるように感じる。そのまま二の腕をちぎろうとするように、強く爪を立てて握り、早歩きで家に戻った。

「また来てくれたんですね！ 缶蹴りの人！」

「長島継人……」

継人は崇られて余計苦痛が酷くなっては困る、とモモの言う通りこの前のコインランドリーへ、全く同じ時間の夜の十一時にやってきた。モモからその日「明日来い」と言われたものの、継人の調子が優れずに数日経ってからの来訪となった。そしてやは

り、幻覚ではないであろう防災頭巾に炎頭、通学中の女子高生の体をした怨霊が継人を出迎える。
「長島サン！ この前は時間を取らせてごめんさい、遺書は書けましたか？」

「……」

継人は手を握って言い淀む。今日は以前のスウェットの着回しでなく、タンクトップに薄手のパーカー姿であった。

「書いてない？」

「……あー、そういうことになる、なりません」

「へえ、いいですけど！ ワタシには関係ありませんし。さあ今日こそ仲間になってもらいます、せっかく助っ人も呼んだんですから」

モモは洗濯物を畳むためのテーブルに向かって手を広げる。継人はモモの手の先を見ると、そこには安っぽい灰色の猫のぬいぐるみが置いてあった。

「彼女は子供え物のぬいぐるみに宿ってしまったアキコおばさんです！」

「やだもう、誰がおばさんよ」

猫のぬいぐるみから中年ぐらいの女性の声が出た。こちらには頭が炎の女子高生らしき存在がいるので、もう今更継人は驚かなかった。

「モモちゃんは頭が弱いからね、いつもはぼーっと寝てるだけのおばさんを叩き起すんだからよっぽどの事があると思っただけだよ」

「それじゃあアキコさん、ワタシの補助よろしくお願

いしまーす！」

モモは一層頭の炎をぼうぼうと燃やして、継人の方に近寄った。

「大丈夫ですよ、もう何も心配はいりません」

継人の心臓より少し右にある淀みのような、鉄の塊のような重たい何かが、だんだんと研がれるように丸くなって、なめらかになって、軽くなっていく。

「……ん？ あれ、アキコさんもしかして調子いいですか？」

「そお？ そんなでもないけど」

「ワタシもです、なんでこんな上手いきそうなんでしょうね」

怨霊の二人がそう話している度に、だんだんとその淀みのような何かが減っていくスピードが落ちていく。

「モモちゃん今日はもう無理かも」

「残念！ じゃあお休みしてくださいね、ありがとうございました！」

アキコが離脱し、モモも継人の肩から手を離れた。

「アキコさん効果でしょうかね、前よりかは幾分マシでしたよね！」

「まあ、確かに……？」

「長島さんはなんだか煮え切らないですねえ、ワタシは実感しました！ アキコさんの復活を待つ間、また別の助っ人を探してきます！ 長島さんはどうしますか？」

「俺は帰るよ」

「そうですか！ それではまた！ 死装束はもったかつこいい服にするんですよ！」

その帰り道。明らかな変化が継人の中にあった。

やはりあの怨霊たちが継人を呪おうとしていたその時、継人の中にある淀み……つまりモモが「嫌い」の感情を幽霊っぽいことで消費するように、継人もモモやアキコによってマイナスな感情を消費されている。確実に継人は心が、いや、足も手も、頭も軽くなっていった。今にも空が落ちてきそうな悲壮感に覆われた灰色の継人の中の世界観が、再び少しでも彩度を加えて雲が動き出した。萎れていた植物も、太陽や月に顔を向けようと動き出している。彼女たちのおかげだ。しかし、彼女たちは怨霊である。怨霊である彼女たちに、「俺の中にあるマイナス感情を使ってくれ、そうしたら俺は生きようと思えそう」なんて言ったらどうなる？ そもそもそれを言ってしまったらきつと、この長島継人を呪おうの会はきつと解散してしまう。主に継人を呪おうとしているモモは「仲間が欲しい」のだから。となると、ただ一つ。

「黙ってよう」

モモを利用するしか、幸せになりたい継人には残されていかなかった。彼女はSNSで光り輝く継人の幸せの近道のように見えた。

「こんばんは！ あれ？ 少し早いですね？」

火頭の女子高生はコインランドリーのドアを開けて継人を出迎えた。かなり申し訳ないと思いつながら、モモの力を利用して決めてから、継人はモモに毎日会いに行った。途中アキコのような珍客もいた日もあったが、もれなく呪殺は失敗……継人からしてみれば、「怨霊療法」は成功している毎日であった。

「そんな早い？」

「ええ、だいぶ。時計がここにはないので正確にはわかりませんが……それになんだか顔色も良く見えます。あ、晩御飯が好きなメニューだったりしましたか？」

「いや普通……じゃないか、最近飯が食えるようになったんだ」

ほう？とモモは小首をかしげた。モモが継人を呪おうとしている際、無意識なのか継人の方の負のエネルギーを使用していることがわかった。

やはり、モモと何回も会う内に継人の精神は以前のように健全に、色鮮やかに、活発さを増しているののであった。継人は慌てたように話題を変える。

「いつもより？」

モモを利用することにした継人は、あまり生きることにポジティブな姿勢を見せなくなかった。しかし、モモの返答は継人の想定外であった。

「……ワタシはもう、ご飯なんてわざわざ食べようつ

継人は答えない。

「本当に遺書書きましたか」

継人は顔をあげて、モモの炎を見つめている。

「その服でいいんですね」

継人は何もしない。

「本当に、本当に、いいんですよね」

継人が挫折したあの瞬間から、継人の胸の奥には、揺らぐことのない大木の根のようなしびれがある。

「長島サン」

どうやらモモの力では、その大木を斬ることが出来ないようだった。

「……モモ？」

ここまでの感覚は、幾度となく毎回の感覚であった。第三の管で全身を廻っていくシャリシャリも、根本にあるものをどうしても消せない事実も。故に、継人にはこれといった恐怖は感じなかった。それは、継人がモモを信用していないからであった。

「すみません」

モモは継人から手を離れた。モモはモモを信じている、だからこそ、今回で本当に継人を呪えると確信していたのだった。

「やっぱりダメでしたね、ワタシとしたことが。アナタがご飯の話なんてするから、ちよっと揺らいじゃったんですよ」

モモは最初からずっと、その異形の姿から連想さ

て思わなくなっちゃったんで、羨ましい」

何回か会っただけの彼女から、初めて樂觀的な空気が消えた瞬間だった。モモの頭は炎だ。だから今、彼女はどんな眉をして、目の色をして、口をどんな風にしていいのか分からない。

「モモ、ごめん俺……」

「いや長島サン、これ怨霊ジョークですよ？ この通り、口がなければどこから食べると言うんです？」

モモはそうやって切り返したが、彼女の動きのぎこちなさは継人に伝わった。モモは咳払いの声をだし、指パッチンの仕事をしたあと、継人を指さした。「今日はイケる気がするんです」

「本気で呪いますからね」

「ああ」

「……マジですよ？」

「……」

「それじゃあ……」

モモは例のごとく、正面から継人の肩を掴む。モモはだんだんと継人の首元に手を寄せていく。継人の首にある、血管でも神経でもない、何かの管たちがモモの力をからだ中に巡らせているのがわかる。シャリシャリしたフラップのような感覚が、肩を通り、腕を回り、胴体を落ちてゆき、足を辿る。

「……マジで死にますよ、長島サン」

れる恐怖や嫌悪感を感じさせない。まるで本当に同年代の少女のようだ。

「……人殺しはいけませんね」

モモはスカートの裾を掴んで、握りしめた。継人は己のやろうとしていたことが、いかにグロテスクであったかをしみじみと自覚する前に、ずっとひそかに思い続けていたを口に出す。

「じゃあなんで広告なんか出したんだ」

モモは怒られた後の子供のような声色でこう答えた。

「ワタシは広告なんて出してませんよ？ スマホに干渉出来るぐらいの力を持つてるなら、一目目でアナタは死んでましたし」

SNSのプロモーション広告に書かれていた文字は、継人にとってあまりにもうまい話であった。

蓋を開けてみれば、「怨霊パワーで呪殺してさしあげましょう」という内容だったのだが、ここまで継人の呪殺を手伝っていたモモは広告型ポルターガイストを起こしていないことがわかってしまった。継人の心は、モモの力によってほぼ全快と言っていただろう。昼夜逆転生活も次第に直り、大学の復学手続きをこの日に終わらせた。普通の人が病院など適切な処置を行って、また人生設計のトロッコを再開する例とは違う、オカルト的な治し方なのは少々不安は残る。だが、治ってしまったものは治ってしまった

た。しかもモモは呪いに対していつからか抵抗を示していたことになる。見た目は炎頭に防災頭巾でも、首から下ののように彼女はおそらくただの女の子であることを、継人は失念していた。

継人は初めて夕方の時間帯にコインランドリーを訪れた。

「モモ？」

モモの姿はなかった。

「モモ？」

返事もなく、モモが招いた客たちもいないようだ。沈みかけの太陽は、不気味に店内を夕方のだいたい色に照らす。

「ん？」

見られている。急に、視線を感じる。久しぶりに味わうこの感覚に継人は少し気が参る。モモと出会う前は、何をしても罪悪感を感じていた。街中を歩いていても監視をされている。そんな世界が継人には存在していた。

「いやでも……」

おかしい、これは精神的なものじゃない。初めてコインランドリーを訪れた時感じた。

そんな感じだ。

目を大きく見開いて、白眼には通うはずのない血が見えて、全身を撫でるような寒気と、異様な威圧感を放つ。

モモが可愛らしく思えるような、そんな禍々少女

が。目の前に。

「広告？」

これは見てはいけないものだ。これは絶対に聞いてはいけないものだ。

継人はすぐに目を塞いだ。瞼の裏に、少女の血走った目が無数に浮かぶ。

「広告？」

目を腕で塞いだまま、後ずさりしながら、コインランドリーの出口をもう片方の腕で探す。

「広告？」

コイツだ。絶対にコイツだ。全てがコイツに仕組みられていたんだ。

「広告？」

継人はドアの取っ手を掴むことが出来た。そのまます勢いよく、ドアを引き、外に出ようとした時だった。

「誰！？」

底抜けに明るい声だが、オカルト的ピンチな状況に雷霆のごとく降り立った。入れ違いのようにモモは継人の体をすり抜けると、継人はドアが開いたはずみで外に放り出された。

「あれ、長島サンだ？あのぉー、そのアナター——」

異形のモモはそれに話しかけた。しかし「それはモモの姿を見るやいなや、次のまばたきで目を開ける時には姿を消していた。

「モモ……」

「大丈夫ですか？長島サン、派手に飛び出してきました

したけど。さっきの人、相当な怨霊ですから下手なことされてたらかなりヤバイですよ」

「多分大丈夫だと思おうわ……それより」

継人は怨霊との出来事を添えながら、モモに広告型ポルターガイストは先程の怨霊によるものだったかもしれない、と説明する。

「あー、ですよね？そんな感じしました、あの人多分また戻ってきますよ」

モモは腰に手を当てて、コインランドリーの外を向いた。

「ワタシの不調も、きつとあの人が原因でしょうね……うん。長島サン、突然ですがしばらくお別れとなりそうです」

「え、は？」

モモは継人に一歩近付いた。

「あの人はきつと、アナタを絶対に追いかけて、こちら側に引き込むことでしょうね」

「……いや俺は」

「ワタシは生前もバカと言われたことはない、そう記憶しています。そのぐらい分かっていますよ、長島サン」

モモは継人にはもう死ぬ意思がなく、生きる意思も持ち合わせていることを理解して、許容しているようだった。

「ワタシは生きた人間として、アナタに協力したかった……ええ。それだけが心残りです……そろそろ来ま

すよ。いいですか、一度進み出したらお家に入るまで振り返らないでくださいね。ワタシの完璧な計画が崩れますので」

「モモ、まだ俺言いたいことが」

「あのねえ、死にたくないのに死にますよ、継人サン。早く家に帰ってください」

実体化を始めたモモに胸辺りを軽く蹴られ、継人はコインランドリーを追い出される。振り返ると、中には業火の頭の女子高生が仁王立ちで来る怨霊を待ち構えている。モモは指を指して早く行け、とジェスチャーを継人に送る。継人は早歩きでコインランドリーを背に進み続ける。

後ろで「いったい！」「マジでやめてください！勘弁して」という大きなモモの声が聞こえる。怨霊と戦っているはずなのに、モモの良くも悪くもいつでも空気を軽くさせるあの調子のせいとか、モモがあの怨霊の背中を踏んづけて「来ましたね長島サン」と出迎えてくれる未来しか継人には想像がつかなかった。モモは全てをわかった上で、この茶番に付き合ったのだ。

彼女を善良な怨霊と言わずして、なんと言おうか。

深夜に起きた原因不明の某所の廃コインランドリー爆発事故は、死者を出さず。

しかし、死者が一人、化けて出るとか。



星槎国際浜松
二年 村松 彩

「考え続けること」

ジェンダーは世界的に重要な問題だ。日本においては、女性の社会参画が不十分であること、雇用機会や賃金が不平等であること、家庭内での無償労働の負担が女性に偏っていること、性や生殖に関する健康と権利が守られていないことなど多くの課題がある。また、途上国での女性差別はさらに深刻である。これを解決するために、私は主に三つのことが必要だと考える。

まず、ジェンダーに関する価値観をアップデートすることだ。私たちはみな、必ず何らかのジェンダーの固定観念を持っている。例えば、子育てに積極的に関わる男性を意味する「イクメン」という言葉があるが、その女性版として「イクジョ」のような言葉があるとしたら、多くの人が違和感を覚えるのではないだろうか。これは、男性が子育てをすることはまだあまり一般的ではないのに対し、女性が子育てをすることは当たり前であるという固定観念が影響していると考えられる。現代のジェンダー不平等はこのような古い社会的規範が原因の一つであるので、一人ひとりがジェン

ダーに関する価値観を変えていくことが改善につながるという。

次に、ジェンダーに関する知識を身につけることだ。先述のように、日本には性や生殖に関する健康と権利が守られていないという課題があり、なかでも望まぬ妊娠をしてしまう女性がいることはその最たるものだろう。この背景には性と健康に関する知識不足、性的暴行による強制などがあるため、性教育やジェンダー教育の推進によってこれを是正していかなければならないのだ。また日本では、2023年に当時の中学校に広く配布されていた性教育副教材「思春期のためのラブ&ボディBOOK」が一部の政治家やマスコミに非難され絶版になるなど、「過激だ」「行き過ぎている」といったことを理由に性教育がタブー視され、抑圧されてきた歴史がある。しかし、社会学者の加藤秀一は著書で当該教材を引用してこのように説明している。「周囲に振り回されず、自分で考え、自分の意見を持ち、主体的に行動できるようにすること——これはリプロダクティブ・ヘルス&ライツだけではなく、まさしく『民主主義』の基本理念そのものではありませんか。」(加藤 2017, p.211) つまり、性について正しい知識を得ることは人権を守るためだけでなく、国家や権力者の思うままに操られることなく生きていくために必要なのである。

最後に、最も大切なのは、ジェンダーの問題について自ら考え、行動することだ。私は、ナイジェリアの内閣府男女共同参画局はこう定義している。ひとりひとりの人間が、性別にかかわらず、平等に責任や権利や機会を分かちあい、あらゆる物事を一緒に決めることができること。従来の男性優位な社会ではなく、女性優位の逆差別的な社会でもなく、両者が平等な社会であるよう、社会に属する全員が自分と他人を尊重して生きていけることを願ってやまない。

作家チママンダ・ンゴズイ・アデーイチエによるTEDトーク「男も女もみんなフェミニストじゃなきゃ」での彼女の主張にとっても共感する。彼女は「男性あるいは女性で『今でもジェンダーの問題は存在するから正し改善しなければならない』という人」をフェミニストであると定義し、多くの人がこの言葉を取り戻すよう呼びかけている。日本ではフェミニズムについて、なんとなく怖いもの、近寄りがたいものというイメージが強いかもしれないが、本来のフェミニズムはアデーイチエが定義するようにもっとポジティブで、軽い気持ちで触れていいものだと思う。私たちにできることはたくさんある。消耗品の交換や毎日の献立決め、ゴミの仕分けのような名前のない家事をリスト化し、改めて家事の分担を考え直すこと。十八歳以上なら、選挙に行つて女性差別解消に関する公約を打ち立てている人を応援すること。そして、ジェンダー差別について声を上げている人を無視しないこと。「そこまで気にすることじゃなくない？」などと言って問題を軽視するのではなく、ジェンダー平等のためにどうすればよいか考え続けること。このような、アデーイチエ的フェミニストになることで、これからの社会をより良いものにできるのではないだろうか。

以上より、私はジェンダー平等を達成するために、ジェンダーに関する価値観をアップデートすること、知識を身につけること、考え、行動することが必要であると考えます。ジェンダー平等の定義について、

文献 加藤秀一 (2017) 「はじめてのジェンダー論」有斐閣 佐藤文香 (2019) 「ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた あなたがあなたらしくいられるための29問」一橋大学社会学部佐藤文香ゼミ生一同 (著) 明石書店 EARTH NOTE 編集部 (2023) SDGs 目標5「ジェンダー平等を実現しよう」の現状と世界と日本の取り組みを解説 <https://www.yoridori.jp/earth-note/gender-equality/> (2024年8月15日取得) スペースシップアース編集部 (2023) SDGs 目標5 ジェンダー平等を実現しよう—現状や問題点と企業の取り組みを解説 <https://spaceshipearth.jp/sdgs5/> (2024年8月15日取得) 5. ジェンダー平等を実現しよう—SDGsクラブ—日本ユニセフ協会 (ユニセフ日本委員会) <https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/17goals/5-gender/> (2024年8月15日取得) TED (2012) Chimamanda Ngozi Adichie: We should all be feminists <https://www.ted.com/>

talks/chimamanda_ngozi_adichie_we_should_all_be_feminists/transcript?guid=on&subtile=en&language=ja (2024年8月15日取得) 内閣府男女共同参画局 みんなで目指す! SDGs×ジェンダー平等(仮) https://www.gender.go.jp/kaigi/renkei/team/jisedai/pdf/jisedai11_01.pdf (2024年8月15日取得)



「龍」
鈴木 敬太(星槎国際浜松2年)



「かわインコ」
田中 茉穂(星槎名古屋中学校3年)

【部門賞 エッセイ部門 受賞】

「みんな、元気で」



星槎国際名古屋
専攻科 三年 久米 弘記

……なぜだろう。ありふれた言葉のはずなのに、何でこんなにも僕のこころを掴んでしまうんだ。

僕は今、ある歌手のコンサートツアーのファイナルを観に、会場に来た。絶対来たかった。何が何でも来たかった。

……コンサートなんて、いつでも観に行けるだろう。そう思う人も居るだろう。

でも、これが最後かもしれないんだ。

なぜなら、あの人は、もう七十五歳。いつが最後になってもおかしくないんだ。

本人は、声が出るうちは、やり続けると言っているが、いつ声が出なくなるかも分からない。いくら、原曲キーで歌っているからって……最後になるかもしれないんだ。

コンサートが始まった。

オープニング映像が始まり、いちばん良いところ

で、あの人が登場する。

……会いに来てくれてありがとう。あの人に対して、その言葉が浮かんだ。

一曲目が始まった。僕は周りのお客さんに負けじと大きな声で歌った。

とても幸せだった。

二曲目、三曲目が終わり、フリートークが始まった。「今日は、なんとと言ってもファイナルです! 盛り上がっていきましよう!」

そう、あの人は意気込んだ。大歓声上がる。それから、様々な曲を歌った。

往年の名曲、コマーシャルでお馴染みの曲、落ち着いた雰囲気曲、元気の出る曲、本当に色々な思いつきの曲を歌ってくれた。

そして、最後の曲をやる前に、

「今日は、今まででいちばん、みんなの歌う声が聴こえました。本当にありがとう!」

あの人はそうお礼を言った。

……何言ってるんだよ。お礼を言うのはこっちの方だよ。いつ歌えなくなってもおかしくないのに、ファンのために、歌ってくれて、笑わせてくれて、感動させてくれて、何よりあなたが元気で居ることが嬉しいんだよ。

そうこころの中でお礼を言った。

最後の曲が終わると、鳴り止まないアンコールの

声。僕も喉が潰れそうになりながらもアンコールと叫び続けた。

再び、あの人とサポートバンドの人が出てきた。

さらに二曲、歌ってくれた。

そして、最後の曲を歌い終わると、再びアンコールが鳴り止まない。

僕も叫び続けた。

すると、あの人たちは、捌けると見せかけて、再び持ち場に着いた。

そして、「みんな、元気で」とマイクでささやいた。

……なぜだろう。ありふれた言葉のはずなのに、何でこんなにも僕のこころを掴んでしまうんだ。

本当に最後の曲が始まった。

しかも、僕のいちばん好きな曲だった。

僕は思わず、泣いてしまった。

泣きながら歌い、手を叩いた。

そして、曲が終わると、僕はあの人が見えなくなるまで手を振った。

……みんな、元気で。

これからも、元気でいます!

【部門賞 詩部門 受賞】

「十六時の陽炎」

星槎学園高等部大宮校
一年 宮崎菜々子



帰りの電車の窓から見える夕焼けは
ほんの少しだけ明日への不安を思わせる
トンネルを抜けたあと突然、差し込んでくる
オレンジ色の強い光は
私を現実へと引き戻す
まるで明日へのカウントダウンをしているみたい
この電車を降りてしまえば
「今日の私」はいなくなる
夜になれば「明日の私」が待っていて
「今日も長かったね、おつかれさま」とでも言ってく
れるだろうか



「大海を泳ぐ」
瀧澤 冬弥 (星槎国際帯広2年)

【部門賞 俳句部門 受賞】

夏の日に 紅き炎が 星を灼く

三年 星槎国際立川
原島 知紀



【部門賞 短歌部門 受賞】

爛爛と 真白が降って 息を染め
頬は桃色 街は藍色

一年 星槎国際立川
武者 静夜



【生徒会特別賞 俳句部門 受賞】

花火舞う 暗やみ飾り 笑顔咲く

三年 星槎国際浜松
堂本 柚衣



「雲の隙間から」
佐々木未桜 (星槎国際浜松2年)



「ダビデ像」
小野 育和 (星槎国際甲府2年)



「星槎 OP 文芸部門ポスター」
村上芽衣香 (星槎国際富山1年)



「SHONAN BEACH」
中辻 凱斗 (星槎学園高等部湘南校1年)



「りんご (食用不可)」
鈴木 陽華 (星槎国際静岡3年)



「夜深臨散」
須貝 咲良 (星槎もみじ中学校2年)



「雨上がり」
高木 胡々 (星槎国際丸亀2年)



「まだ見ぬ世界へ!」
加茂 嵯織 (星槎名古屋中学校2年)



「お食事会」
田中 絢優 (星槎国際北九州1年)



「通過点」
高田 由菜 (星槎国際静岡2年)



「Baaang!!!」
齋藤 絢香 (星槎国際静岡1年)